

鈴木三重吉「桑の実」論——〈事件性〉のない小説

高野 奈保

—

鈴木三重吉「桑の実」(『国民新聞』大2・7・25〜11・15)に対する評価は、次に掲げる三重吉本人の発言に集約されていると言つてよい。

「桑の実」は単に或一人の女が或シテュエーションに立つての通常な気分と感情とを書いて見るといふだけの考で、何等の事件的の発展もない、平面的なものである。その中に何こそこの暗示がある訳でもない、濃厚な色が出てゐる訳でもない、言はゞ平凡な或日常生活の描叙に過ぎないのである。

(鈴木三重吉「桑の実」に就て)「秀才文壇」大2・11)

「平凡な或日常生活の描叙に過ぎない」ことは、「重大な人生の秘密や、深刻な人生の意義が含まれてゐるといふのではない。」(赤木桁平「桑の実」を読む)「国民新聞」大3・3・24)ことを意味していた。「人生の奥に流る、何となき悲哀」が「底調をなす」「作者の無自覚な咏嘆」あるいは「リリック其のもの」である「桑の実」の作者三重吉には、「此の意味に於いて」「詩人である」(赤木、前掲)という評価が下された。

この単行本発行当時の評価は、後年に至るまでは踏襲されている。「三重吉の本領は、詩の世界にあつて、生活の世界にあるのではなかつた。」(鈴木三重吉)「漱石・寅彦・三重吉」岩波書店、昭17・1)と述べる小宮豊隆や、「作家としての鈴木三重吉の資質」を「抒情そのもの」

(「作家としての資質を探る——結びにかえて——」『鈴木三重吉の研究』明治書院、昭53・11)とする根本正義の表現を借りれば、「桑の実」は「抒情」的な「詩の世界」を描くことを得意とした三重吉の本領が発揮されていると同時に、三重吉の限界点を示す小説だということになる。

安藤久美子も、おくみを三重吉の「願望から生まれ」た存在ととらえ、「青木とおくみの平行線の関係、叙情的気分と、自然・事実描写の巧みさ」という特徴を挙げて「桑の実」を「以前の作品の総決算であつて、新たな創造の芽を含まない」(『漱石と三重吉』国文学 解釈と鑑賞)昭57・11)と断じた。

しかし、「桑の実」が単なる「総決算」かどうかについては、再検討の余地があると思われる。後述するように、「桑の実」に「事件的の発展」や「暗示」、「濃厚な色」の要素は散見される。「桑の実」は、「話の筋の中に事件は起りようもない」(宮沢賢治「鈴木三重吉 桑の実」『国文学』昭60・9・25)のではない。それらの要素が物語に回収されなかつた結果、「平凡な或日常生活の描叙」だけが、浮き上がってきたものなのだ。本論では、「おくみという娘が、妻と別れた画家青木の家に一時住み込みで手伝いに行くことになり、青木の家の人々との温かな交流も生まれる中で、約束の時間が過ぎ皆に惜しまれながら去っていく」という「ほのぼのとした情感」(中島国彦「解説」『桑の実』岩波文庫、平9・6)に包まれた物語が、どのような条件下で成立したかについて考察する。

まず、主人公であるおくみの人物設定について、確認してみよう。なお、本文の引用では、傍線は事実を示す箇所、波線は感情を示す箇所に、破線はその他の注意したい箇所に付している。

おくみが厄介になつてゐるカツフエーは、おかみさんが素人の女手でやつてゐられる小さい店だけれど、(略) おかみさんは、月末になると、よく浮かない顔をして、ペンと帳面を手持つたま、茫やりと一つところを見つめてゐられるやうなことがあつた。／おくみはさういふ容子を見たりすると、何だか自分がいつまでもぶらぶらとこゝにかゝりものになつてゐるのが済まないやうな気がして、いつも自分で先へくと用事を求めて働くやうにしてゐるのだけれど、(略) おくみはたゞ十になられるあき子さんと小さい男のお子さんの面倒を見ると、一寸したお針なぞをしたりする外には、これとてすることもなかつた。(一一)

右は、「桑の実」の冒頭である。おくみは素人経営のカツフエーに「厄介」になる「かゝりもの」である。そのことに引け目を感じて働くこととするが、実際はすることがない。

おくみの家庭環境は、複雑である。実母の生死は触れられていないが、実父は二歳で死に別れ、継母とは、継母の再婚の際に十一で養女に出され、「二年ばかり前」(一)に音信不通になった。養父はおくみが女学校入学後間もなく死別し、女学校は退学を余儀なくされ、「手もとが苦しく」なつた養母からは「足手纏ひ」のように思われていた。(父)とは死別し、(母)には不要の存在として扱われてきたわけだ。そのためか、おくみは養母の手紙に「近頃ひどく気が弱くなつてゐるやうな容子」を讀み取つても、心配よりも「養母の事を考へると、しまひには何だか自分

のからだが自分のものでないやうな厭な氣」(十八)が先に立つてしまふ。おくみ本人は、「下町の商品陳列館の小売部」での売りや「或小さい商会」の給仕で「僅の日給」(一)を稼いだ後、おかみさんのところへ女中代わりに入り、更におかみさんの紹介で西洋人の子守を、養母のつてで外務省勤務の役人の邸で小間使いをした。その役人の海外への転任で失職したため、「平河さん(おかみさん——論者注)へおたのみして、どこへか身の振り方のつくまでかうして当分来てゐる」(二)のであつた。奉公を続けることは「心もとない」が「帰らうにも家はないし、何かして行かうと言つたところで身に何一つ手に入つてゐる業もない」。だが、このカツフエーでも、「今ではゐてもゐなくてもいい、やうな」存在になつてしまひ、おくみは次のように思い悩む。

どうせずつとここにゐられるわけでもないのに、何とかしなければならぬのだけれど、養母がいふやうに、またどこかのお邸へ上るといふのももう気が塞がるやうに進まない。水仕事のやうなことをしてもいゝから、のんびりしたところにあたいやうな、我儘な心持も動くのである。ミシンを教はるところがあるからそこへ這入らうかと思つたけれど、それはおかみさんが拙らな言はれる。何をすると言ても今からではもう遅いし、どことて取りつくところもないやうな気がする。／出来ることなら、此ま、こゝの家のものにして戴いて、いつまでもおかみさんを頼りにして暮して行つたらと思つたりするのだけれど、自分には何とて嵌つた用事も無い。お安さんがしてゐるやうなことが出来たら、あゝした全くの他人を置いたよりもおくみが働けば丁度いいのだけれど、あゝした、お客の氣心に合はして笑つたり相手になつたりすることはおくみには出来ないし、もししなければならなくなつたとしたら情ない。やつぱりまたどこかへ奉公に上らなければならぬまいか——。(一二)

おくみの悩みは、堂々巡りである。現状を打破したいが、行動に移すことができない。奉公はしたくないが、職業訓練の試みはおかみさんに否定され、だが強いて通うほどの意思もない。平河家におくみの望む仕事はない。現実的な選択肢として再浮上する奉公は、やはり避けたい。おくみに生まれる「のんびりしたところにゐたい」という「我儘な心持」は、いわばモラトリウムへの願望である。画家の青木の家に「手伝ひ」に行くのは、「行くところが極まるまでの間、かた／＼自分に取つても都合がい、」(三) ことだったのだ。

実際、青木家は仕事のしやすい家だった。青木は掃除や買物物を協力し、青木の弟で入試のために一時滞在している洗吉もお使いに出てくれる。「みなの方が何でもおくみのするだけの事で辛棒」し、四歳になる青木の息子の久男は「すべてに聞分のよいお子さんで、少しも無理をお言ひにならない」ため、おくみは「延びりして用事」(九) を済ませる。

青木は「二年ばかりフランスに行つて」(三) いた画家で、おかみさん曰く「おとなしい、いゝ方」(三) である。妻とは帰国して間もなく離婚して久男と二人家族だが、久男は妻の不倫相手の子供という疑惑があるせいか、「荷厄介」(四) だと言ひ、冷淡な態度を取る。収入は不定期で、経済的に豊かではないようだ。おくみからは「つましく寂しく暮らしてゐられるやう」(三) に思われている。帰国してから「怠ける癖がついて一寸も実のあるものを画」いておらず、「自分自身が淋しい」、「色んなこととくしやく／＼するせいかとき／＼画なんか画くよりも、茫然やり寝ころんで空でも見てる方がいゝ心持のときがありますよ。」(四) と語っている。こちらにも、モラトリウムへの願望を持った人物だ。

青木とおくみは、大人しい性質だが家族への情が薄いという点、モラトリウムへの願望を持っているという点で、共通している。そして、二人は「寂しさ」という感情を媒介にして、接近することになる。

青木家は「小造りな、建つて間もない明るい綺麗な家」で、おくみを「すつと」させるが(四)、まもなく青木家の家庭の事情が判明し、おくみは家に「陰気な色」(十一) を感じる。だが、おくみは家を出たくなくなるどころか、「いつその儘、こゝに置いて貰ひたくもあるやうな、はなれ難い心」(十二) を抱くようになる。このおくみの態度は彼女を「実にすなほな、純の純なる心」(本間久雄「鈴木三重吉論」「文章世界」大3・3)の持ち主だと理解させるに十分なのだが、この同情を寄せる過程でここで確認しておきたい。

おくみは、青木の家庭の事情を「自分の事のやうにうら寂しく心に練り返」(十) すうち、青木に「寂しさ」を読み込み、その感情に共鳴するようになる。

おくみはさういふ、このお家のことを聞いてからは、当分はこちらの気のせいか、何だか淋しい人たちの間に来てお世話をしてゐる自分だといふやうな心持がそれとなく考へられた。／＼さつきも青木さんが坊ちゃんを外の湯へつれて行かれて、もうとつぷりと日もくれば、雨もよひらしい夕方を、浮かない顔をしてとほ／＼手を引いて帰つて来られたときにでも、青木さんがどんなことを考へてゐられた続きかといふ事が、おくみにはちやんと解るやうな気がして、自分までがさびしいやうな心持がするのであつた。 (十二)

おくみは、夕方のぐずついた天気という情景と、青木への「淋しい人」という認識に基づき、青木の内面の「寂しさ」を読み取り、それを「理解」し、自分の感情に反映させている。「こちらの気のせい」という誤読の可能性を踏まえてなお読解し生成した「寂しさ」を仲立ちにして、他の区別が曖昧になるほど、強く青木に共感するのである。

他の区別が曖昧になるのは、感情だけではない。おくみは、精神的に病んだ青木の妻のことなど、青木家の人間について「あれこれと取り

とめもないことを考へて居たあとの気分」も「何だか人のことではなくて、自分のこれから先の事をそれとなく自分に教へられでもするやうに」(十二) 思うやうになる。青木家の事情が無条件におくみの将来と重ね合わせられ、おくみは次のように考える。

おくみはさうした心持から、自分がさき／＼どんなことになつて行くだらうかと云ふことを考へて、心細い思ひに目を開いてゐた。あつてないやうな自分の養母のことも考へられた。(略)／おくみは自分の家と云ふものがないことや、だれ一人しんみりした血つゞきの人も居てくれない事なぞが、あじきなく考へつめられた。山の手に居たときには、よくそんな事を思つて一人寢床の中で泣いて居たりした事がいくどもあつた。／おくみはいつしか自分の小さかつたときから今日までの事をそれからそれへと考へ返して、言ひ知らぬ涙つばい自分を見守つた。しまひには、たゞ女に生れて来たと言ふ事それ自身さへはかないやうな心持がした。／おくみはかういふ夜を寝て目さめた朝などは、ときとして、坊ちゃんや暗い内からも目を開いて、(略) たわいな言を言つてゐられたりするのが、何だか、もうすつかり他人ではないやうにいちぢらしいにつけては、自分もこれからまた他へ行つて、気の解らないところへ奉公に上つたりするよりも、いつその儘、こゝに置いてもらひたくもあるやうな、はなれ難い心があるのであつた。(十二)

おくみは、将来への不安を起点に、現状の孤独を嘆き、過去を悲しみ、自身の存在そのものも儚く感じる。こうした生まれた頃からの悲しみを抱え、今まで一人で堪えてきたおくみが、自分の生い立ちの複雑な事情を「何もお知りにならない」「いたはしい」(十一) 久男の無邪気なさまを見て「他人ではない」と感じるのは、単なる感情の高ぶりからだけではない。ここでもおくみは、久男の「いちぢらし」さを読み込み、自分の

「はかな」さと共鳴させることで、一心同体と言つてもいいところまで、心理的な距離を縮める。

言うまでもなく、おくみによる〈寂しさ〉の発見は、彼女の一方的な思い込みに過ぎない。だが、この思い込みは、青木と桑の実を食べ、青木の絵について会話する際に、青木本人から承認されてしまう。

まずは桑の実のエピソードから確認してみよう。おくみは、青木から庭の桑の木から取つた実を二人で食べるといふ「子供のときに言ふやうな事」を「真顔」(十二)で誘われる。子供の頃の思い出を語り合いながら二人で桑の実を食べた翌日、青木は絵を描き上げ、おくみに披露し、絵の感想を尋ねる。

「これを見ると気分が浮き／＼するやうに愉快になりますか?」／青木さんは微笑みながらもつと碎いて聞き直して下さる。／「私の気のせいでございますか、よく見て居ります中に、何だか寂しいやうな氣になつてまゐりますけど……」(十四)

おくみの答えは正解だった。青木が絵を「寂しい心持が底を流れ」る「傑作」と自画自賛し、絵をおくみに贈る。

「お礼に上げるんだからい、よ。」／「ほ、何のお礼でございます。」／「この画の寂しいところが解つてくれたのと、私の画が一つ出来たのを悦んでくれたから。」と仰る。／「画がどことなく寂しいのは、私がいつも寂しいからなんだ。おくみさんにはそれがいつも解つてゐてくれるやうな氣がして感謝したくなつたんさ。」と青木さんはつとめて笑ひながら仰る。(十四)

青木の絵は、「一人で生えて大きくなつたらしい」(十二) 桑の木の實を、家族との縁が薄いおくみと、事情は違ふがやはり家庭を作ること、に失敗した青木とが、子供の頃の思い出を共有しながら食べたという経験の具象化だ。だから、青木が「いつも寂しい」ことを「いつも解つて

ゐてくれるやうな氣」がするという理由でおくみに絵を贈ったことは、おくみの（寂しさ）の発見を承認したという意味がある。⁽³⁾

絵という言葉を用いない表現手段が使われたこともあって、青木の（寂しさ）の中身は、ここでは問題にならない。⁽⁴⁾ また、おくみの（寂しさ）が青木に理解される必要もない。桑の実を食べたことで、既におくみは青木の経験を自分のそれと重ね合わせ、青木の絵が完成を「自分のものが出来でもしたか」のように話し、「自分までが何ものかを得たやうに」祝っているからだ。この幻想上の（一体感）が成立しているからこそ、絵を受け取り「涙ぐまれる」やうな「しみぐ／＼した心持」（十四）になるのである。だから、青木を「自分の血つゞきの方」と「物恋し」（十五）くなるのだ。

このように丁寧な段階を踏んでおくみと青木が接近した後、にもかかわらず二人の関係は、何故かこの状態のまま固定され、おかみさんが青木家に新しい婆やを見つけてきたことで、突然終りを告げる。

桑の実を食べたとき「おくみさんはずっとこの儘私の家においてくれな
いかなあ。」（十三）と発言した青木は、弟の洗吉が実家に帰ったために
空いた部屋をおくみに使わせる際、「女があたりをきれいにしておきながら
縫つてるのはいいものだ。」（二十）と述べて、おくみを異性として見て
いることをうかがわせる。が、青木が実際に取った行動は、おくみに「も
うしばらく面倒を見て貰ふ訳には行かないか」（二十五）とおかみさんへ
頼むところまでで、「御裁可」が下りなければ「僕はおくみさんが行つて
しまふのは何だか厭だね。」（二十六）と不満を述べるだけで、おくみと
の別れを受け入れる。

おくみは「これでこゝから一応すぐ平河さんの方へ帰るとして、それ
から先をどうしたらいいものかと考へると、自分ながら心もとない気が
する。（略）おくみはこのやうな事を相談すべき人がだれ一人とて無いの

であつた。」（二十五）という、青木家に手伝いに行く前と全く同じ悩み
を抱えたまま、「青木さんたちによくして戴いて、自分の家かなどのやう
に心安く置いて戴いたこの二月ばかりの間のこと」を「自分の一番恋し
い頃のやうに思ひ返される」予感を胸にして、青木家を立ち去る準備を
する。

青木家での二ヶ月間は、おくみにとって人生の一時的な避難所として
位置づけられるだけで、小説は閉じられるのだ。

三

「桑の実」が、青木とおくみが（寂しさ）を媒介に接近した後も、それ
以上関係が変わらず、またおくみの将来の見通しも立たず、結果的にた
だおくみが青木家に行つて帰つてくるだけの小説になつた理由は、三点
挙げることができる。

一番大きな問題は、おくみに考察したり、心情を言語化する能力がほ
ぼ欠如していることである。

第一章で、おかみさんに「いつまでもここにこんなにしてるのも拙ら
ないわね。」と言われたおくみは、次のように反応している。

おくみはさういふ得手勝手なわけからではもとよりのない。かうして
何こそおかみさんの足しにもならないのが済まないから色々考へる
のであつた。／＼私がつと何か出来ますとい、んでございますけど、
かういふ調子で一寸も物の間には合ひませんし、／＼おくみはさうい
ふときにも、自分の心持はこれだけしか得言はなかつた。 （一）

おくみは、自分の中で明確になつて簡単な「自分の心持」すら説
明できない。

青木に絵の感想を求められた際も、最初は「自分の感じる心持をどう
にも纏めて得う言はない」（十四）ので、解らないと答えている。寂しさ

を指摘するのは、前節で確認したように、青木に愉快な気持ちになるかと半ば誘導するように尋ねられてからだ。

また、問題解決に向けた検討もできない。前節でも述べたように、自分の将来の悩みは、堂々巡りになった。これは直近の問題でも同じで、青木家にいつまでいるのか、いるべきなのかについても思考を整理できず、突然考えるのを止めて違う用事を始める。

おくみはずつと置いて貰ふのなら貰ふやうに、おかみさんにその事を言つて置かないでは落ち附かないやうな氣もする。それも、青木さんが、洗吉さんがこゝにお出でになる内におかみさんにさう言つて下さらないと、二人になつてからでは何となく変なやうで極りが悪い。／＼それともいつそ代りの人が早く出来れば何にも片附いて、のだがとも思つて見る。おくみは青木さんにはつきりと相談して見たいと思ふけれど、そんな事を自分からは言ひ出し悪い。おくみはそのやうな纏まらない心持をして洗吉さんのお机に坐つて、思ひ立つた序に、養母への見舞の手紙を書くと、丁度青木さんが坊ちゃんをつれてお湯へお出かけになるので序に出して戴いた。(十八)

おくみは、事後承諾のように青木家に居続けるのが落ち着かないので弟の洗吉がいるうちに青木から言つてほしいが、自分から青木には切り出しにくいので、何の行動も取れない。右の引用の波線部の理由が明らかでないで、検討すべき内容自体が漠然としてしまつてゐる。おくみは考えもまとめられないし、思考の断片も明確なものがない。

おくみの言表能力や思考能力の不足は、物語の展開に重大な影響を及ぼす。小説の語り手が、おくみに寄り添つてゐるため、第一節で挙げた「事件的な発展」や「暗示」、「濃厚な色」がいくらか提示されていても、おくみが気づいたり解釈できない以上、それらは描写されるだけにどまるところからだ。右の引用でも、例えば「何となく変」は、青木とおくみの仲

が恋愛に発展したとおかみさんに思われるから、という推測が可能だが、青木に相談しづらい理由は確定できない。小説内で説明されない以上、それらの表現は空白のまま、回収されず、取り残されてしまふのだ。

また、青木の離婚の原因が妻にあり、久男は不義の子で、青木は完全な被害者であるという解釈が固まつた過程も、このおくみの特徴と無関係ではない。

おくみは久男を「目もただけは青木さんに似てゐられるやう」(五)と感じてゐた。また青木の学生時代から雇われ「青木さんの洋行中は奥さんと二人で」(三)留守番をしていた婆やは、妻に同情して、青木に内緒で妻と面会してゐる。おかみさんの説明も「奥さんは(略)やつぱりたうとどうもあれだものだから」、「詳しく言へばもつとあるんだけど、まあさう言つたやうなごた／＼した事でいろ／＼何して」(十一)と具体性に欠ける。

だがおくみは情報をそれぞれ比較せず、「おかみさんの目の色を読むやうに見ただけで、自分からはそれ以上にほじつては得う聞か」ないまま、元々寂しそうに見えていた青木を「お気の毒」(十一)と同情して、そのまま信じてしまふ。信じたため、久男の顔のことや婆やのことは、作中では顧みられなくなる。おかみさんには口止めされ、婆やは青木家を去り、妻も実家でかつ精神的な病に冒されてゐるため、新たな情報が追加されることもない。青木が「淋しい人」(十二)として位置づけられたのは、反証の材料が放置され、当事者が小説の表舞台に上がる機会を失つた結果だと言へる。おくみの言表能力の欠如は、小説の「事件的な発展」を阻み、青木とおくみの接近と固定の原因となつたのだ。

次に挙げられるのは、性への規範意識である。まず、おくみは性に対して潔癖で、社会的倫理や立場を重視する性格の持ち主として設定されている。前節で確認したように、カップエーの接客も「情ない」(二)と

避ける。また、おかみさんと青木の関係について噂が立った際も、「おか

みさんの気質を知つてゐるおくみには、もとよりそんなことは信ぜられる筈もなかつた。(略) 根もないことを言ひたがつたのに極つてゐる。青木さんにしたつて、あゝした堅い方である上に、そのときには、ちやんと、お貰ひになつたばかりの奥さんがおありになつた。」(三)と、頭から否定している。また、青木の妻の不倫疑惑についても、「一通り以上に立派なお家からお出でになつた方が、人の奥さんとして、どうして、さういふふしだらな事が出来るのだらうと思ふと、それは自分のかんちがひぢやないかといふ氣もするのであつた。」(十一)とあるように、身分に付帯する行動規範が、現実には適用されると信じている。

「桑の実」が「地の文に敬語をふんだんに用いた文章」(第六章 永遠の少年と「桑の実」——三重吉の求める女——『永遠の童話作家 鈴木三重吉』高文堂出版社、平10・10)で書かれていると指摘した半田淳子は、この敬語表現におくみと青木の接近を妨害する原因を求めている。だが、もし敬語表現が理由になるならば、青木から絵を受け取るという、「青木さんが自分を一人前の女のように扱つて下さるのに馴れて、いゝ氣になつてゐてもするやうに見えさう」(二十四)なことは起きないだらう。敬語表現は、おくみの社会的な立場の反映であり、二人の関係が固定された原因は、むしろその立場に対して要求される性の規範にあると考へる。

そもそも、おかみさんがおくみを青木家へ派遣を許可した要因は、弟の存在だつた。

青木さんがたつた一人であるらつしやるのだつたら、若い女がついてゐるといふ事が何だか世間の手前などに対しても変なやうな氣もするけれど、それにはちやんと弟さんも入らつしやるのだしするから、そんなにも何も心配しなくてもいゝしと、おかみさんはおくみの身に

なつてかう仰る。

(三)

二十歳そこそこの未婚女性であるおくみが、成人男性の家に住み込み、家事をすることは「変」なことであつた。十五章で「いきな造り」の向かいの家の奥さんに「さつきから、それとなくおくみの方をまじく見て」いるのは、「世間」からのまなざしだと言へる。

そのため、おくみは「変」なことを意識し、自分の行動を制限する。桑の実を食べたときに青木にずっと家についてくれと頼まれると、自分に行くところはないがと「言ひかけたが、あとは得言はないで顔を赤らめ」る。青木家で働き続けることになれば「自分も出来るだけ働いて行くけれど、平河さんでどうお言ひになるか、何だか自分からはおかみさんに言ふのが変だしと思つて見」(十三)ると、請け合うことができなくなる。十八章では、おかみさんに相談するならば弟がいるうちにしてほしいが、自分からは青木に言えないと逡巡し、絵をもらったのが「おかみさんの前に氣が咎める」(二十四)のだ。

ただ、おくみは青木との距離を保とうとし続ける訳ではない。桑の実を食べ、翌日青木から絵をもらったおくみは、青木が二時間だけ出かけた夜、左のように彼を強く慕う。

口にごそ言ひ得ぬけれど、昨日今日は、どうしても青木さんが自分の血つゞきの方で、もあるやうに物恋しい。あの戴いた絵にどのやうな額縁がつけられるかといふ事も子供のやうに楽しみでもあるし、そのやうな事が、此頃のたつた一つの物嬉しさである自分が、考へればいつまでも頼りない身の上のやうに小寂しくもある。(十五)

間もなく青木が帰つてきてから、二人で話していると、三味線の話題が出て、おくみは昔の奉公先の奥方が義太夫を語つたことを話しかけ、「何だかそんな事でなくて、ほかに何か言ひたい事があるやうな氣」がする。「それが堀川とか野崎とかいふものを聞かせて貰つたときの物悲しい

心持に似てゐるやうにも思はれる。」(十六)と考える。

青木はおくみの「血つゞきの方」ではないから、青木を身近に感じているのは間違いない。しかし、ここでもおくみの比喩が説明されないの、彼女の心情はこれ以上明らかにならない。しかも青木への物恋しさに続いて、子供のような無邪気な期待や、将来への不安と寂寥が次々に表れ、どの感情に焦点が当たっているのかも、わからなくなってしまう。

三味線の話題でも、「言ひたい事」の内容は不明瞭だ。手がかりは堀川(『近頃河原の達引』の堀川猿廻しの段)や野崎(『新版歌祭文』の野崎村の段)といった義太夫の内容だが、比喩としての効果は薄い。どちらも心中する二人を身内が黙って見送る場面だが、おくみがどの登場人物に感情移入しているのか、あるいは漠然な印象を抱いているのかも、わからないからだ。顔を赤らめたおくみがその場を去ろうとするところで場面が終わり、次の章では季節も移る。この日の感情は、その後の日常の描写の中に埋没してしまう。

このように性への規範意識は、おくみの言表能力の欠如が加わることで、おくみと青木との距離を一定のところを保つ効果を生んでいると言える。

最後は、おくみに将来のことや当面の問題を相談する相手と機会が与えられないことである。おくみは自分の頼りなさや将来の不安を折々漏らす、解決することができない。

おかみさんはおくみの将来を考えてくれている人物だが、相談は結論まで辿り着かない。青木家に行く前、おくみはおかみさんに「自分のこれからの振り方について惑ふ心持」を話す、自分の心情を説明しきれぬうちに、「い、からまあ当分この家の子になつて入らつしやい」と積極的にモラトリアムを勧められ、「それよか一寸」と話を飛ばされ、おくみも何故か「これでございませう？」(一一)と同調して話題を変えてしま

う。青木家からおくみを戻すことも、「ちゃんとした女の人に附いて色々教はつて置かなければならない事もある」から「一応帰つた方がい、」(二十五)という、不明瞭な理由しか挙げられない。もちろん、経済的に脆弱な彼女をおくみが頼ることは、現実的ではない。

養母は、十二章でおくみに将来のことを手紙で尋ねたことがあり、おくみのことを気にしているが、こちらも頼りにならない。おくみが手紙で「一寸こちらにも代りがないので私もいつそ当分しばらくこゝに置いて戴かうかとも思ふがと、相談のやうに言つてやつたのに、何とも返事をくれ」ず、後に届いた返事は全く要領を得ない内容で、しかも「このまゝ、こゝにあるゐないについては何にも言つてはなかつた。」(十八)からだ。

青木は先に述べたように、相談がためられる相手だ。また、相談に足る相手とも言えない。青木はおくみの派遣延長を断られれば「厭に」なり「一人でどこかへ下宿」することを望み、久男を「だれか貰つてくれないものか知ら。」と嘆く。おくみに再婚を提案されても、家事の担い手がいないことを困ると肯定するものの、「妻君なんていゝ加減なものだからね。また変なものに來られたら大変だ。——御覽よ、今時分蝶々が二匹あそこを飛んでは。」と考へたくない事を考へさせられでもなすつたやうに、他の事を「(二十六) 言い、現実と向き合うのを避けるからだ。これは、十八章でおくみが思案を止めて手紙を書いたことと酷似している。相談に入る前に、話が逸れてしまふだろう。

青木家を出ることが決まり、おくみは「今度はもう平河さんのお家へもさう長く御厄介になつてゐたくない。」と思うようになるが、「このやうな事を相談すべき人がだれ一人とて無い」(二十五)のは変わらない。しかし、先に述べたように、おくみに一人で思考をまとめて結論を出すことはできない。おくみにできたのは、無断で青木の夏布団を作ろうと

決めたことだけだった。

おくみが関わる人間に、彼女の未来への道筋を示しうる者、経済力のある者はいない。この小説において、未来は心もとなないものでしかない。逆に、「青木さんたちによくして戴いて、自分の家かなぞのやうに心安く置いて戴いたこの二月ばかりの間のこと」は、「この先いつまでも自分の一番恋しい頃」(二十五)という、いわば幸福な過去としての特権的な地位を占める。懐かしがるための時間に、「事件的の発展」や「暗示」、「濃厚な色」は必要とされないのである。

四

三重吉は、「作家として世に立てから」(「中央文学」大6・9)で、おくみを「私が自分の好きな一種の女を空想的に拵へた」と述べ、「實際的に考へて見ると、ずるぶん理想的に出来上つてゐますが、作品の上では、これでもそんなにひどく不自然に感じられないといふ意味に於て多少真实性を帯びてゐると自信」を抱いている。「不自然」のないよう、三重吉は以上に述べたように、入念に作つた設定を守り、描写を配分した。おくみと青木の関係も「いつまでも、同じ平面上の上を同じ感情の濃度で、同じ距離を保つて平行線の進」ませるための「かなり苦しい努力」をして、幸福な過去を作り上げたのである。

赤木桁平は「桑の実」を「無自覚な詠嘆」(前掲)と評し、本間久雄は「生活内容の豊富と、鮮明と、複雑とを、おくみに付け加へた一個の新人生をクリエートする折のあることを、私かに待ち設けてゐる。」(鈴木三重吉論「文章世界」大3・3)と期待したが、これらの評価は三重吉にとっては不本意なものだったろう。

三重吉は彼曰く「それ相当の理由」を持って「今のいはゆる悪い意味に於ての新しい女は、絶対的に嫌ひ」と放言したが、一方でおくみが「今

日迄」出逢つたことはないし、これからも出逢はれない」と思う程度に「デッチ上げ」(「感じの宜い女」「新小説」大3・9)の性格だということとも自覚していた。当時の小説が評価される基準となる「事件的の発展」や「暗示」、「濃厚な色」が、おくみの「デッチ上げ」と両立しないことも理解していた。裏を返せば、三重吉は「桑の実」を書くことで、おくみという自分の理想の女性像を葬ることになつたとも言える。「桑の実」を期に「自分の作のあらゆる欠点が目につき」、「厭なものを、無理に書いて行く根気」を失つて「休息」(「作家として世に立てから」)を決めたという三重吉の発言は、自分の理想と当時の文学的評価の乖離が決定的なものになつていたことを意味していた。

注

(1) 徳田秋聲は「近来での傑作だと思ふ。」(「本年の文壇 創作界を顧みて(下)」「時事新報」大2・12・14)と例外的に激賞した。秋聲は「桑の実」を「人生の底へ」と突込んで行く、三重吉氏の作物の深さ」として捉えたが、着目したのは「あゝした女性と、其女性を取りかこんだ周囲の人たちとの、毎日々々の生活の間につつて来るあの瑣事」であり、三重吉や赤木の読解枠組を越えるものではなかつた。

(2) おくみについては、三重吉自身が「少しく理想化が過ぎ」て「單純な性質」になつたため「人があの作を評する場合には、こゝに欠点を置かれるかも知れないと思ふ。」(三重吉、前掲)と予想しており、實際「余りに空靈的、理想的であつて、人間的、現実的でない」おくみと、彼女を理想の女性とした「作者の懐抱する女性観そのもの」に対して「最も大なる不満」(本間久雄「鈴木三重吉論」「文章世界」大3・3)を持たれた。

(3) 飯田祐子は、明治四〇年代の雑誌の投稿欄における〈寂しさ〉という「文学的感情」に基づく同性間ネットワークの存在を指摘している（「彼らの独歩——『文章世界』における「寂しさ」の瀰漫——」『日本近代文学』平10・10、「愛読者の文学的欲望——『女子文壇』という教室——」『日本文学』平10・11、「告白」を微分する——明治四〇年代における異性愛と同性愛と同性社会性のジェンダー構成」『現代思想』平11・1）。実際は非対称であるにせよ、青木とおくみの間に擬似的な共同体が構築されたと言えるだろう。

(4) 〈寂しさ〉の内実の説明は、感情の共有を妨げる可能性があるの
で、逆に避けなければならぬ。なお、青木の妻は女学校を出て、「少しばかり物をお書き」になるセミプロ作家だったが、「女としては其やうな事をなさるのはお好きにならない」青木に「いやみ」を言われて筆を折った。その後体調を崩したことがきっかけで「ヒステリーのやうな風に」（十一）なる。この小説では、内面を秩序立てて表象しうる人物は登場しない。

(5) 現実には、青木が重要な相談事をおかみさんにだけ持ちかけたり、おかみさんが彼女にだけ書ける「温かい手紙」（十一）を青木に書くなど、特別な関係を匂わせる手がかりはある。だが、おくみは全く疑わない。

(6) 二十三章で蒸し暑い夜、二人は眠れずに言葉を交わし、おくみは唐紙を開けて膝を突くが、同様にすぐに場面転換が行われ、何があったのかは語られない。

(7) 大正二年当時も女中は払底しており（清水美知子「第三章 社会問題化する女中」『女中』イメーヂの家庭文化史『世界思想社、平16・6』）、おくみは奉公で生活することができる。しかし、経済問題が解決されなければ将来への不安を抱き続けるだろうし、自分の悩

みを言語化できないため、孤独はついて回る。大正三年九月には、生田花世が「食べることと貞操と」（「反響」）を発表し、「私たち女に財産と職業とがない事は本当に忘れぬ事の出来ぬ災害である」と述べる。青木家での生活は、経済問題という「災害」からの一時的な避難という点でも、「一番恋しい頃」とされるに値するのである。
(8) 中村孤月は「赤い鳥」や「桑の実」や「女」の如な作品を幾つ創作しても、今の時代には何等の深い影響をも与へない（略）自分は作家が其敏感によつて斯ういふ美しい空想にのみ憧憬れることなく、何故に現実に目を向けないかと思ふものである。（「現代作家論」『文章世界』大4・1）と述べた。なお三重吉の創作の軌跡については拙論「鈴木三重吉「小鳥の巢」論——新ロマンチズムとの関係から」（『日本近代文学』平17・10）を参照されたい。

（たかのなほ 日本文学研究所研究員）